

1997年度学会報告優秀賞

ロシアにおけるミツキューヴィッチ『ソネット集』受容
(1826～1835)

久 山 宏 一

1. ロシアにおけるミツキューヴィッチ受容の第一期

1822年ヴィリニユスでミツキューヴィッチは『詩集 第一巻』を刊行しポーランド文学史にロマン主義元年をしるす。23年10月、彼を含む秘密組織フィロマト会メンバーが民族主義思想を広めたかどで逮捕され、翌年8月ロシア中央部へ追放される。以後29年春まで4年半のロシア時代に生み出された二つの傑作『ソネット集』(1826, モスクワ)と叙事詩『コンラート・ヴァレンロート』(1828, ペテルブルク)は彼の地の文壇から熱狂的な評価を受け、ロシア帝国分割領リトアニア出身のポーランド語詩人は「スラブのバイロン」と称えられるようになる。¹

ロシア出国から3年半後、詩人はフィロマト会員の逮捕・裁判・追放という自伝的素材をもとにロシア帝政を糾弾する詩劇『父祖の祭 第三部』を公刊する(1832年末, パリ)。33年末にはペテルブルクの外国語作品検閲委員会が詩劇のロシア帝国領内への持ち込みを厳禁、34年には旧作にさかのぼってミツキューヴィッチ全作品の公刊・翻訳禁止処置がとられ、最終的には詩人の名を活字にすることすら不可能になってゆく。² こうして1830年代半ばにロシアにおけるミツキューヴィッチ受容の第一期が閉じられる。

2. 1820年代前半までのロシア・ソネット

『ソネット集』受容の第一期(1826～1835)を論じるには、その背景としてロシア・ソネット史の概観が必要である。³

ロシアで最初のソネット創作が試みられたのは18世紀初頭だが、⁴ それから1世紀後の1820年代半ばまで、A.A. デリヴィクのソネット連作のほかにはロシア語ソネットの傑作として記憶されるような作品は存在しなかった。当時この形式の詩の古典的達成としてまず連想されたのはイタリア・ソネットである。ロンサール型フランス・ソネットの適応例は皆無に近く、シェイクスピア・ソネットが盛んに翻訳紹介されるようになるのは19世紀後半以降であったから。

R.H. バーテュシュコフの論文「ペトラルカ」(1817)や彼によるペトラルカ・ソネットの自由詩訳などにより、14世紀のイタリア詩人は自伝的恋愛詩人の象徴となっていた。⁵ 一方、擬古典主義者（アルハイスト）の П.А. カテーニンや B.K. キュヘリベッケルは、崇高な愛国的感情を歌い上げたソネット作者として、17世紀のイタリア詩人フィリカヤを「ペトラルカ的なるもの」の反対物に持ち上げた。⁶ 当時のロシア人がソネットの規範に関連付けた主題は「イタリア」「(女性または祖国への) 愛」だったと言えよう。

ソネットをめぐる通念として特筆すべきは、その創作の困難さをめぐる神話である。フランス古典主義詩学の聖典『詩の芸術』におけるボアローの断言「完璧なソネットは長詩と同等に賞賛される」は、バイロンとその模倣者によって長詩がロマン主義詩の代表的詩形と見なされつつあった当時、時代錯誤的な呪文と響いた筈である。

П.А. ヴァゼムスキーが1810年代後半に記したノートには、ボアローの引用の後に「ソネットの栄光はフランス・カフタンと同じく地に落ちた。約束事に基づく美は一時の価値しか持たない」とある。⁷ 一方、17年のキュヘリベッケル論文もボアローのソネット神格化への疑義を含む。「世の中には野蛮人（キュヘリベッケルのような——引用者注）もいて、その目には叙事詩を創作しようという壮図だけでも、ソネットその他のありとあらゆる小詩形の傑作をしのいで見える」。⁸ いずれも、ソネットの形式主義・主題の軽さへの批判である。一方、A.C. プーシキンはジャンル的高低比較そのものを笑う。「完璧なソネットは、長詩と同等に賞賛される。すぐれた寸鉄詩は、悪しき悲劇よりもよい。……これはどういう意味か？ 良き朝食は悪天候よりもよい、などと言えるか？」と。⁹

1820年代後半になると、これら詩人・批評家が己れのソネット観を変化あるいは深化させるのだ。

ヴァゼムスキーは『ソネット集』刊行の数ヶ月後に「オデッサ・ソネット」の一部と「クリミア・ソネット」の全篇を散文訳し、『モスクワ電信』に掲載する。¹⁰ 序文には、ロマン主義を標榜する詩人たちもソネットを創作するようになったこと（すべてのロマン派が始祖と仰ぐシェイクスピアも150余のソネットを残していた）、ソネットが連作形式で書かれる傾向が出てきたことが指摘されている。¹¹

崇高な主題を盛るに足る詩形式を称えるキュヘリベッケルも、実は20年代半ばに恋愛ソネットの習作を一つ残している。だが、彼が独創的なソネット作者

になるのは、デカプリストとして逮捕幽閉された牢獄でヴァゼムスキーの「クリミア・ソネット」散文訳を読んでからである。¹²

30年にプーシキンは「芸術と芸術の本質的価値——美・愛・真——の継続性」¹³を主題に、生涯でただ一度だけソネットを、しかもその三連作を創作する。第1ソネット（ソネット史を記述したソネット）は、様々な時代と民族の生み出した名手を列挙して、詩における純西欧的伝統（ソネット）の継続性を証明した作品である。古典西洋のダンテ、ペトラルカ、シェイクスピア、カモエンスと同列に、現代イギリスのワーズワース、リトアニアのミツキエーヴィッチ、ロシアのデリヴィクが並んでいる。この作品はワーズワースのソネットの「改作」で、プーシキンはワーズワースの作成したソネット名手のリストに現代の名手を加えた7詩人（ワーズワース自身を含む）を、時代・民族の点から4グループに分け、各連に配置したのだった。¹⁴

ミツキエーヴィッチ作品によって、ヴァゼムスキー、キュヘリベッケル、プーシキンはソネット詩形をめぐる概念の変容を余儀なくされたらしい。前二者はロマン主義的ソネットの可能性に目覚め（ソネット観の変化）、プーシキンは中世から現代まで一貫するジャンルの伝統を確信した（ソネット観の深化）。

3. ミツキエーヴィッチ・ソネットの特徴——段階的進化性

ミツキエーヴィッチが1818年にはじめて創作した単独のソネット作品は、『詩集 第一巻』の「雑篇」の部に、巻の大半を占める「バラードとロマンス」以外の詩形作品として、頌詩・エレジーなどと並んで収録されている。続く第2・3段階は「オデッサ」「クリミア」のソネット連作である。

主題（自伝的／感傷的恋愛）によってペトラルカの伝統につながるのは、第1段階と第2段階の前半であり、作品集の構成（二つの対照的な連作からなる「ソネットの本（単行本ソネット集）」）によってペトラルカの伝統につながるのは、第2・3段階である（ペトラルカの“Canzoniere”は歌謡、バラードなども含むが、大半（全366作品のうち317）はソネットで、生前のラウラを歌った作品とラウラ死後を歌った作品の二部構成。同様に、シェイクスピアの“Sonnets”も友人に宛てた作品と恋人に宛てた作品の二群に分割される）。

第2段階の「オデッサ・ソネット」の主題は「19世紀の社交界に出入りする男の成長記」である。¹⁵ソネット書法の面からは、イタリア的伝統から寸鉄詩的なフランス型を経て最終作では恋愛そのものが作品の主題として拒否される

にいたる、つまり、ソネットがルネサンス以前のタイプから古典主義タイプを経て19世紀タイプ（主題選択の自由性）へと進化してゆく過程をなぞったような構成になっている。

第3段階の「クリミア・ソネット」は、ミツキューヴィッチ自身「クリミアで土地の風景を取り入れた長詩を構想した。『チャイルド・ハロルド』との避け難い類似がその構想を萎えさせた」¹⁶ と告白するように、基本的に旅行記として成立した。主題は超経験的自然と旅人を襲う郷愁。¹⁷ ソネットは旅行記の自己完結的構成単位（大雑把に、旅行記を構成する個々の「風景」と呼んでもいい）となった。¹⁸ 「クリミア・ソネット」を完成させた詩人はボアローをもじってこう語っている。「(複数の) ソネットを書く方が、ひとつながりの長詩を書くより難しい」と。¹⁹ ひとつの完璧なソネットを長詩と比較して神聖化した『詩の芸術』の作者に対し、ミツキューヴィッチは旅行記をひとつながりの長詩として書くより複数ソネットの集合として書く方が技術的に困難だった、と回想するにすぎないのだ。

このような地点までジャンル意識を段階的に進化させた作者だからこそ、『ソネット集』の扉にペトラルカからの引用「かつての私は、今とは少しばかり違っていた」を題辞として刻んだのである。

4. ミツキューヴィッチ・ソネットのロシア語訳

さて、『ソネット集』のロシアへの最初の紹介者ヴァゼムスキーは「オデッサ・ソネット」はペトラルカの恋愛詩にすぎないと喝破して2篇しか散文訳せず、バイロンのオリエンタリズムに満ちた「クリミア・ソネット」を全篇散文訳し詳細な解説を付した。こうして、ミツキューヴィッチのソネットへのジャンル意識進化の到達点にあたる作品群が、西洋ロマン主義の達成としてロシア人に受容されてゆくことになる。

ヴァゼムスキーはポーランド語を熟知していた。²⁰ 逐語的散文訳が採用された理由は二つある。一つは、ポーランド語とロシア語の言語としての類似性を示したいという願い。モスクワで刊行されたポーランド語の書物だから、原文と翻訳の比較も容易だったのである。もう一つは、原文の内容を翻訳者のエゴで飾らずに忠実に伝える、翻訳としての「より栄光ある」作業、すなわち詩作品の異言語等価物の創造は、本散文訳を下敷きにして行われ得る（その実践例として、И.И. ドミートリエフによる自由詩訳「航海」がすでに引用されている）²¹ という、詩作品を最初に外国語で紹介する者が何よりも果たすべき役

割の見極め。

芸術的翻訳の適任者として指名された「第一級の若き詩人たち」プーシキン、E.A. バラティンスキーはついにその呼びかけに応えなかったけれども、それから数年のうちに刊行されたいくつもの詩的翻訳はヴァゼムスキーの散文訳に基づいている。²² 原文・散文訳・詩的翻訳の連環をいくつもの実例に見られた

い。

プーシキンとリツェイで同級だった A.D. イリチェフスキーは「クリミア・ソネット」のうち3篇を厳密なソネット詩形で翻訳した。ヴァゼムスキーの第3ソネット「航海」散文訳では、原詩で二つの意味（船の甲板と旅人の胸）を持つ *piers* が *лоно/грудь* と訳し分けられているのが目を引く（表の①）が、イリチェフスキーはさらに *лоно* を捨てて動詞 *прикинуть* を採り、結果として船と旅人が胸を合わせて一体になるという官能的イメージを消してしまっている。しかし、ソネットのソネットによる翻訳は達成された（②）。

Ю.И. ポズナンスキーは28年に第1ソネット「アッケルマンの草原」の内容を14行ならぬ20行に盛りこむ。この詩的翻訳者はヴァゼムスキー訳の *Литва/голос* を *милая Литва/голос приветный* と陳腐に敷衍してしまった（③）。同じ訳者が31-32年にはヴァゼムスキーの散文訳を経由せず、詩形もソネットにより、14作品を立て続けにロシア語に移植する。しかし、その芸術的達成は個々の翻訳について様々であった。

29年には、『ソネット集』の全体を詩的翻訳で紹介する試みが二つ現れる。B.И. リューヴィッチ＝ロマノーヴィッチの翻訳『アダム・ミツキューヴィッチ詩集』と、И.И. コズロフの訳業『アダム・ミツキューヴィッチのクリミア・ソネット——イヴァン・コズロフの翻訳と模倣』である。

原文から直訳した前者は（ソネットを含む）様々な詩形で訳されたソネットを原作とは異なる順序で配列し、翻訳の別ヴァリエーションまで併録してみせた野心的な試み。ヴァゼムスキーの散文訳をもとに原作通りにソネットを並べた後者にも詩形は自由詩とソネットが混在しているが、最後に手がけた3作品、しかも「クリミア・ソネット」の要をなす3作品（「アッケルマンの草原」「巡礼」「アユダフ」）のみがソネット詩形を守っている。²³ コズロフは「模倣」から「翻訳」に接近しつつ原作のロシア語による等価物を模索していったと想像される。例えば、「模倣」として成立した第3ソネットでは、原詩3行を8行に引き延ばしさえしている（④）。その一方で第1ソネットを「翻訳」した際には、厳密なソネット詩形を守っているのだ（⑤）。

表	散文訳・ソネット以外の詩形による翻訳・ソネット詩形による翻訳の例
原文	<p>I. Adam Mickiewicz, “Stepy akermańskie” (1826)</p> <p>W takiej ciszy! — tak ucho natężam ciekawie, Że słyszałbym głos z Litwy. — Jedźmy, nikt nie woła. 「アッケルマンの草原」(こんな静けさの中で! 私は耳をそばだてる。 /リトアニアからの声が聞こえはしないかと。行こう, 呼ぶものはだれ もいない)</p>
散文訳	<p>П.А.Вяземский, “Аккерманские степи” (1827)</p> <p>В этой тиши так напрягаю ухо любопытное, что мог бы услышать голос с Литвы — едем; никто не взывает.</p>
ソネット 以外の 詩形による 翻訳	<p>Ю.И.Познанский, “Аккерманские степи” (1828) ③</p> <p>〈...〉 Ах, как тихо здесь! — Я Напрягаю так слух, что из милой Литвы Ко мне голос приветный — чуть слышный дойдет... Едем; никто не зовет.</p>
ソネット 詩形による 翻訳	<p>И.И.Козлов. “Аккерманские степи” (1829) ⑤</p> <p>Жду голоса с Литвы — туда мой слух проникает... Но едем — тихо все — никто меня не кликнет.</p>

以上のようなほとんど無作為に抽出された例から引き出せるのは、1820年代末の翻訳者たちはソネットを翻訳するのに様々な詩形を用いた、その成果もまた様々であった、という概括的結論にすぎない。ただしそれ以降の翻訳を調べると、ソネットはソネットで翻訳するという規範が確立してゆくのが確認される。そしてミツキューヴィッチ作品が作者名を伏せて密かに発表されるようになる1846年以降には、ごくわずかな例外を除いて、ソネットの翻訳はかならずソネット詩形で行われることになる(ただし、M.Ю.レー尔蒙トフ, A.A.

表	散文訳・ソネット以外の詩形による翻訳・ソネット詩形による翻訳の例
原文	<p>III. Adam Mickiewicz, "Żegluga" (1826)</p> <p>Wyciągam ręce, padam na piersi okrętu, Zdaje się, że pierś moja do pędu go nagli: Lekko mi! rzeźwo! lubo! wiem, co to być ptakiem.</p> <p>「航海」(両手を広げ、私は船の甲板(胸)にうつぶせに寝る。／私の胸が船を加速するよう感じられる。／軽い! 楽しい! 今こそ私にはわかる、鳥になるとはいかなることかが)</p>
散文訳	<p>П.А.Вяземский. "Плавание" (1827) ①</p> <p>Втягиваю руки, падаю на лоно корабля: кажется, грудь моя поддает ему бегу. Легко мне! Дюбо! Знаю, каково быть птицею!</p>
ソネット 以外の 詩形による 翻訳	<p>И.И.Козлов. "Плавание" (1829) ④</p> <p>И на корабль я упадаю, Моею грудью намираю; Мне мнится, будто кораблю Я грудью хода придаю, И руки вытянув невольно, Я с ним лечу по глубине; Легко, отрадно, любо мне; Узнал, как птицей быть привольно.</p>
ソネット 詩形による 翻訳	<p>А.Д.Илличевский. "Плавание" (1827) ②</p> <p>Приникнув к кораблю, я руки вдаль мечу И грудью быстроты придать хочу: Легко мне, весело, понятно птиц паренье.</p>

グリゴリーエフ、H.V. ベルクといったロマン主義後期の詩人・翻訳者たちは、意識的に原詩の形式破壊を行っている。ミツキエーヴィッチ・ソネットのソネット以外の詩形による最後の翻訳は、ベルクによるもの(1860)であった。

さて、『ソネット集』受容の第一期に最も繰り返し翻訳が試みられたのは、「アッケルマンの草原」(ソネットで2回、自由詩で3回)「航海」(ソネット
で3回、自由詩で4回)「チャティルダフ」(ソネットで2回、自由詩で3回)
の3作品であった。

5. ロシア・ソネットへのミツキューヴィッチ・ソネットの影響

これだけの人気を獲得したミツキューヴィッチ・ソネットが、ロシア詩人のソネット創作にどのような影響を与えたのか（ミツキューヴィッチのソネットが、ロシアのソネット以外の文学作品に与えた影響——例えば、『エヴゲニイ・オネーギン』に現れる「クリミアをうたった詩人」としてのミツキューヴィッチ像——は、別に論じる）。

まず、プーシキンがロシアにおけるソネットの名手と称えたデリヴィクの場合。彼のソネット創作は二つの段階に分かれる。

第一は22-23年に書かれた5つのソネットで、愛情と芸術の永遠性というペトラルカ的主題をめぐる連作である。その主題と主題展開の背景には下の表のような工夫が凝らされていて、おそらくはロシア詩の歴史においてはじめて、ソネットが自然で自由に響いたのだった。「デリヴィクのソネットは、彼個人の全創作のなかでも最良の部分に属する。これは19世紀のロシア・ソネット詩人のなかで希有な事例である」との評言もある。²⁴

題名	主題	背景
① 靈感。ソネット	詩人の誕生	抽象的
② H.M.ヤジコフへ。ソネット	詩の創作	同時代のロシア詩人たちへの呼びかけ
③ ソネット	恋愛	抽象的
④ ソネット	恋愛	イタリア
⑤ C.Д.Пへ（ブルガーリン作「スペインの思い出」を贈るにあたり）	恋愛詩の創作	愛の神の遍在（ロシアも例外ではない）

デリヴィクが27年7月に創作し、作者死後の32年に発表されたソネットは、愛情・芸術に代わり、海原の雄大、そこに停泊する艦隊の勇壮をうたいあげた、前連作とまったく作風を異にするものである。「何だ、遠くで光ったのは。まだ煙を上げている。／何だ、入り江に轟いたあの雷鳴は。／〈…〉／違う、あれは艦隊だ」。²⁵ この作品には、高みから海原を見つめる語り手の視点、超経験的なまでに巨大な自然を強調する絶対者のモチーフ、旅人の独白に対置される（彼より広く深い知覚能力を持つ）他者（デリヴィクのソネットの場合は、

空を舞い飛ぶ鷲)の言葉など、モチーフの点でミツキューヴィッチのクリミア連作と類似点が発見される。古典的ソネット創作の技法を我が物にしていた作者が、旅行中に大自然から受けた印象を基にミツキューヴィッチに倣った新式のソネット創作プロセスを実験してみせたのが、この遺作・第6ソネットであったと推測される。

A.C. ホミャコフはロシア・トルコ戦争従軍後(1830年)、オリエンタリズムに彩られた抒情詩を数作残しているが、詩形の一つにソネットも選ばれている。モチーフから作品に注釈が付せられるテキスト構成にいたるまで「クリミア・ソネット」を連想させる。²⁶

デリヴィクとホミャコフは共にミツキューヴィッチと親密な交友を持っていたことが確認されているが²⁷ デリヴィクのサロンでミツキューヴィッチとたびたび顔を合わせていたプーシキンの場合、ポーランド詩人のソネットから受けた影響は模倣とは次元が違っている。²⁸

プーシキンは各ジャンルを位階的にではなく、それぞれを独自の歴史的特徴を帯びたものとして横並びに捉えていた。²⁹ 「クリミア・ソネット」を契機としてダンテ以来のジャンルの歴史をふりかえり(「ソネット」)、続けて詩人と社会(「詩人に」)、美と愛(「マドンナ」)を主題に選んでいるが、ミツキューヴィッチのように旅行記という全体性の自己完結的な構成単位としてソネットを扱う方向は、プーシキンには無縁だった。長詩を構成するなら、25年以來「オネーギン」のなかでソネットもどきの14行詩が消費されていたわけだが、歴史詩学的ジャンル観を持つ詩人にとって、それと真のソネット創造とはまったく異種の行為だったのである。

一方、バイロン、ミツキューヴィッチなどのロマン主義詩を忌み嫌ったのは、詩に愛国的主題を盛ろうとし、ソネットならばフィリカヤを評価したカテーニンである。彼は34年にソネット「コーカサスの山々」を書くが、その主題は自然への賛嘆ではなく流行のオリエンタリズムへの愚弄である。「役立たずで、美しくもないコーカサスの山々よ、いつからおまえたちはそんなに名高くなったのだ? / 神の創造物か悪魔のいたずらか? / 呪われたものよ、なぜおまえのようなものが造られたのだ?」³⁰

1830年前後10年間に現れたきわめて独創的なソネット作者は、キュヘリベツケルである。流刑されたデカプリストとして作品公刊の可能性を持たなかった彼は、ミツキューヴィッチ・ソネットへの賛嘆の言葉を残し、同じ獄に繋がれたポーランド囚からポーランド語を学び、やがてはポーランド詩を原文で読ん

ですらいるのだが、³¹ 29年から46年までに創作された計9つのソネットに、典型的にミツキューヴィッチ的な主題（恋愛・オリエントへの旅・超越的自然）は見出せない。手法の面では対話形式の導入にその影響が見られるかもしれない。注目すべきは、彼がソネットの連作やソネットを含む諸詩形の連作を試みていることである（「英雄と詩人」の2連作(1829)、キリスト降誕・復活・昇天を主題にした5連作(1832)、「タンタロスと詩人」(1839)の2連作)。ソネット連作はペトラルカ、シェイクスピア以来の伝統的な作品形態だが、後者はジャンルの混合を特徴とするロマン主義詩独特のものである。キュヘリベッケルは諸詩形混合の長詩『ダヴィデ』(1826-29) 第一部の総括「英雄と詩人」にソネットを用いている。こうしたソネットの総合（ジンテーゼ）的用法は、同じ時期に Ю.М. レールモントフや П.П. エルショフが創作した諸詩形混合連作³² にも観察される。

ソネット連作はキュヘリベッケル以外にも5人の詩人が試みた。1820-30年代のロシアで「ソネットの本」が3冊刊行されている。M.M. (マクシーモフ) 『ソネットの試み』I, II(1828)、С.И. ストロミーロフ 『С. ストロミーロフの12のソネット』(1837)、Н.И. ブティルスキー 『私の運命もまた——ソネットによる二部構成』(1837)という今日では詳細なロシア文学史にすらその名を探し当てにくい無名詩人たちの筆になるものである。В.Г. ベネディクトフの華々しいデビュー『詩集』(1835)には8つのソネットからなる連作が、またデリヴィクの年下の友人 М.Д. デラリュエの第一詩集『ミハイル・デラリュエの詩の試み』(1835)にも3ソネットから成る連作が収められている。³³

このうち M.M. 及びベネディクトフ、ブティルスキーの連作は異なる主題を持つ2連作の組み合わせである（M.M. のソネット集は抽象的主题の第1部・24ソネット、具体的情景を描写する第2部・25ソネット、追加・1ソネットという構成。第2部には対話形式のソネットが多数含まれ、語注が付されている。ブティルスキーの大冊はロシア史を主題にした第1部・61ソネット、第2部の序詞としてのソネット、抽象的主题の連作「小太鼓」50ソネットからなる。また、ベネディクトフの連作は「自然」「水星」「火山」「雷雨」「花」という抒情的一人称を持たない自然哲学ソネット5篇と、抒情的一人称の恋愛体験を描く無題の3篇からなっている）。

28年に刊行された M.M. のソネット集は、両連作のはっきりした対照から書物の装丁にいたるまで、ミツキューヴィッチ『ソネット集』を模したことが明らかである。1828年3月 A.E. オディーニェツツに宛ててミツキューヴィッチ

が「すでに僕のスタイルで書かれたロシア・ソネットを見た」³⁴ と報告したのは、28年2月に検閲を通過した M.M. のソネット集第1巻を指している可能性がある。

35年に発表されたベネディクトフの8作からなるソネット連作においても、その構成といくつかのモチーフはミツキューヴィッチ『ソネット集』から借用されたものと判断される。なおベネディクトフによるミツキューヴィッチ受容には後日談がある。詩人としての短い栄光がすぎさった後、彼は翻訳活動に専心し、1850-70年代にかけてはミツキューヴィッチのほぼ全作品をロシア語訳することになったのだった。³⁵

30年代に単独のソネットを発表した詩人には、H.M. ヤジコフ、Л.А. ヤクボーヴィッチ、А.И. ポドリンスキー、С.П. シェヴィリョフ、Е.П. ロストプチナがいるが、彼らの創作に、ミツキューヴィッチにかぎらずこの詩形で過去に書かれたなんらかの傑作の記憶を探り出そうとするのは、無益な企てである。ソネット詩形は、詩人に特定の主題（20年代前半ならば「イタリア」「(女性または祖国への)愛」）を強制しなくなっていた。30-40年代に刊行された詩集におけるソネットは、ほぼ全作品が小ジャンルへの分類が不可能な「抒情詩」と化したなかで、中世以来の西欧的伝統とのつながりをその詩形に残す作品として区別されるにすぎない（バラードもまた、その物語性によって「抒情詩」からの区別がcausing可能だった）。

そこにいたる過程の検証は本稿の課題を超えるが、ソネットという詩形への概念が、本稿で取り上げた10数年間に、ペトラルカあるいはフィリカヤのイタリア的伝統から切り離されて中性化したこと、ミツキューヴィッチの『ソネット集』刊行がそのプロセスに複雑な刺戟を与えたことに疑いはない。

6. 結び

『ソネット集』の刊行後わずか1年数ヶ月後に、実は、マクシーモフという「ソネットの試み」の著者、ついにこれ以外の発表作品を持たなかった無名詩人がこう記していたのである。「ロシア・ソネット最初の試みは、トレジアコフスキーによってなされた。〈…〉その後今世紀初めまで、我が国においてソネットは、まれに雑誌に現れるほかはほとんど忘れ去られていた。ところが先ごろポーランド詩人ミツキューヴィッチが自作ソネットをモスクワで刊行し、ロシア・ソネットを始動させた」と。³⁶ この証言に誤りはなかったらしい。

注

- 1 См: A. Witkowska, *Mickiewicz. Stowo i czyn*, Warszawa, 1986, s. 61.
- 2 См: Л. И. Полянская, "Цензурные дела об издании произведения Мицкевича в России," *Адам Мицкевич в русской печати. 1825-1955. Библиографические материалы*, М.-Л., 1957; И. И. Беккер, "Произведения Мицкевича и царская цензура," *Литература славянских народов*, вып. 1, 1956; S. Biernadski, "Ustęp III cz. *Dziadów* w literaturze drugiego obiegu w Rosji w XIX w.," *Universitas. Twórczość-Wiedza-Wykształcenie*, nr 17/2, 1996.
- 3 ロシア・ソネット選集: *Русский сонет. Сонеты русских поэтов XVIII — начала XX века*, Сост. Б. Романова, М., 1983; *Русский сонет. XVIII — начало XX века*, Сост. В. С. Совалина с участием Л. О. Великановой, М., 1983. ロシア・ソネット史研究: Л. П. Гроссман, "Поэтика русского сонета," *Борьба за стиль*, М., 1927; С. Д. Титаренко, "Сонет в русской поэзии первой трети XIX века," *Проблемы эстетики и жанра*, вып. 10, Томск, 1983; В. Э. Вацуро, "Русский сонет 1820-годов и европейская романтическая традиция," *Гармония противоположностей: Аспекты теории и истории сонета*, Тбилиси, 1985; K. Kuyama, *Sonety Mickiewicza a sonet rosyjski w dobie romantyzmu*, 1996 Sęszew.
- 4 См: Л. И. Бердников, *Становление сонета в русской поэзии XVIII века (1715-1770)*, М., 1985.
- 5 К. Н. Батюшков, "Петрарка," *Избр. проза*, М., 1987. См: *Франческо Петрарка. Библиографический указатель русских переводов и критической литературы на русском языке*, М., 1986.
- 6 П. А. Катенин, *Размышления и разборы*, М., 1981, с. 316; В. К. Кюхельбекер, "Последний Колонна," *Путешествие. Дневник. Статьи*, Л., 1979, с. 519.
- 7 П. А. Вяземский, *Записные книжки (1813-1848)*, М., 1963, с. 27.
- 8 В. К. Кюхельбекер, "О направлении нашей поэзии, особенно лирической, в последнее десятилетие," *Путешествие. Дневник. Статьи*, с. 454.
- 9 А. С. Пушкин, "Отрывки из писем, мысли и замечания," *Полн. собр. соч. в 10 томах*, изд. 3-е, т. 7, М., 1964, с. 56-57. 引用は, 川端香男里訳 (『プーシキン全集 5』河出書房新社, 1973年, 33-34頁) による。
- 10 *Московский телеграф*, ч. XIV, т. 7, 1827.
- 11 П. А. Вяземский, "[Сонеты Мицкевича]," *Эстетика и литературная критика*, М., 1984, с. 66-67.

- 12 В. Н. Орлов, "В. К. Кюхельбекер в крепостях и в ссылке. Новые материалы," *Декабристы и их время. Материалы и сообщения*, М.-Л., 1951, с. 37.
- 13 B. Stawarz, *Liryka Aleksandra Puszkina: Systematyka i ewolucja gatunków*, Kraków, 1995, s. 80.
- 14 См: Н. Б. Яковлев, "Сонеты Пушкина в сравнительно-историческом освещении," *Пушкин в мировой литературе. Сборник статей*, Л., 1926.
- 15 I. Opacki, "Z zagadnień cyklu sonetowego w polskim romantyzmie," A. i I. Opacasy, *Ruch konwencji. Szkice o poezji romantycznej*, Katowice, 1975, s. 76. 「オデッサ・ソネット」における主題・方法の「進化性」については：Cz. Zgorzelski, "O sonetach odeskich," *O sztuce poetyckiej Mickiewicza. Próby zbliżeń i uogólnień*, Warszawa, 1976; I. Opacki, "Człowiek w sonetach przełomu. O sonetach Mickiewicza," *Poezja romantycznych przełomów. Szkice*, Warszawa, 1972.
- 16 *Adama Mickiewicza wspomnienia i myśli*, Z rozmów i przemówień zebrał i opracował S. Pigoń, Warszawa, 1958, s. 73.
- 17 См: B. Dopart, "Poezja transcendentalna *Sonetów krymskich*", *Mickiewiczowski romantyzm przedlistopadowy*, Kraków, 1992; Cz. Zgorzelski, "Pielgrzym w krainie dostatków i kraszy," *O sztuce poetyckiej Mickiewicza. Próby zbliżeń i uogólnień*.
- 18 I. Opacki, "Z zagadnień cyklu sonetowego w polskim romantyzmie," s. 87.
- 19 *Adama Mickiewicza wspomnienia i myśli*, s. 73.
- 20 См: W. Spasowicz, "Książę P. A. Wiaziemski, jego polskie znajomości i stosunki," *Pisma*, t. VI, SPb., 1892; W. Lednicki, *Przyjaciele Moskale*, Kraków, 1935; E. Kucharska, "Piotr Wiaziemski a kwestia polska," *Filologia rosyjska*, 1967.
- 21 Адам Мицкевич, *Сонеты*, Л., 1976, с. 111, 311.
- 22 ミツキューヴィッチ・ソネットのロシア語訳に関しては——「ソネット集」ロシア語訳の目録：Wszzechzwiązkowa Państwowa Biblioteka Literatury Zagranicznej Odznaczona Orderem Czerwonego Sztandaru Pracy (Moskwa), Biblioteka Narodowa (Warszawa), *Polska literatura piękna od XVI w. do początku XX w. w wydawnictwach rosyjskich i radzieckich*, t. 3: *Adam Mickiewicz. Bibliografia przekładów oraz literatury krytycznej w języku rosyjskim wydanych w latach 1825-1981*, Wrocław-Warszawa-Kraków, 1988. ロシア語訳選集：Адам Мицкевич, *Сонеты*. ロシア語訳についての論考：И. Колташева, "О русских переводах *Крымских сонетов* А. Мицкевича," *Литература славянских народов*, вып. 1; E. Kucharska, "Recensja *Sonetów krymskich*

- Adama Mickiewicza na gruncie rosyjskim. 1830-1848,” *Filologia rosyjska*, 1966; E. Kucharska, *Literatura polska w Rosji w latach 1830-1948*, Opole, 1967; С. Д. Титаренко, “Крымские сонеты А. Мицкевича в русских переводах и развитие сонета в конце 20-х годов — 30-х годов XIX века,” *Гармония противоположностей*.
- 23 J. Maliszewski, *Twórczość poetycka Iwana Kozłowa*, Częstochowa, 1984, s.67.
- 24 *Русский сонет*, Сост. Б. Романова, с.11.
- 25 А. А. Дельвиг, *Полн. собр. стихотворений*, (Библиотека поэта. Большая серия), Л., 1959, с.195.
- 26 См: L. Gomolicki, *Dziennik pobytu Adama Mickiewicza w Rosji 1824-1829*, Warszawa, 1949, s.141.
- 27 См: L. Gomolicki, *Dziennik pobytu Adama Mickiewicza w Rosji 1824-1829*, s.227, 238, 259, 268, 315-316; A. Bezwiński, “Chomiakow w kręgu spraw polskich,” *Studia polono-slavica orientalia. Acta Litteraria*, III, 1976.
- 28 プーシキンとミツキエーヴィッチの交友・文学上の影響関係については、膨大な研究の蓄積があるが、日本語文献として吉上昭三の2論文のみを挙げておく。「父祖の祭」第三部「断章」と「青銅の騎士」——ミツキエーヴィッチとプーシキンの関係をめぐって、東京大学教養学部「外国語科研究紀要」22-3, 1974年；「青銅の騎士」におけるミツキエーヴィッチ, 「ロシア・西欧・日本」(木村彰一教授還暦記念論文集), 朝日出版社, 1976年。
- 29 См: Н. П. Степанов, *Лирика Пушкина. Очерки и этюды*, М., 1957, с.149-150.
- 30 П. А. Катенин, “Кавказские горы,” *Избр. произведения*, (Библиотека поэта. Большая серия), Л., 1965, с.231.
- 31 В. Н. Орлов, “В. К. Кюхельбекер в крепостях и в ссылке. Новые материалы,” *Декабристы и их время. Материалы и сообщения*, с.37; “Кюхельбекер о Мицкевиче в письме к Пушкину (20 октября 1830 г., Динабург),” *Русский архив*, 1981, Nr 1, с.139.
- 32 Ю. М. Лермонтов, “Сонет”, *Полн. собр. соч.*, т.1, М.-Л. 1948, с.292; П. П. Ершов, “Смерть Ермака”, Конек-Горбунок, *Стихотворения*, (Библиотека поэта. Большая серия), Л., 1976, с.127.
- 33 「ソネットの本」の原題は、それぞれ, М. М., *Опыт сонетов*, т.I. II, М. 1828; С. И. Стромиллов, *XII сонетов С. Стромилова*, М., 1837; Н. И. Бутырский, *И моя доля. В сонетах. В двух частях*, СПб., 1837. ソネット連作を含む詩集の原題は、それぞれ, В. Г. Бенедиктов, *Стихотворения*, СПб., 1835; М. Д. Деларю, *Опыты в стихах Михайла Деларю*, СПб., 1835.
- 34 Adam Mickiewicz, *Dzieta (wydanie jubileuszowe)*, t.XIV, Warszawa, 1955,

s. 375.

³⁵ См: А. А. Илюшин, «Бенедиктов-переводчик Мицкевича,» *Польско-русские литературные связи*, М., 1970.

³⁶ М. М., *Опыт сонетов*, т. I, с. 7-8.

Койчи КУЯМА

РЕЦЕПЦИЯ «СОНЕТОВ» А. МИЦКЕВИЧА В РОССИИ (1826-1835)

В начале 20-х годов XIX века русские поэты, если и сталкивались с сонетом, то скорее воспринимали его сквозь призму известного изречения законодателя эстетики классицизма Н. Буало: «Безупречный сонет один стоит длинной поэмы». П. А. Вяземский в своей записной книжке пишет с негодованием, что сонет уже считается пережитком давно минувшего прошлого. В. К. Кюхельбекера-архаиста не удовлетворяла доминирующая в содержательном плане сонетной структуры тема любви. А. С. Пушкин же иронически подсмеивался над формулировкой французского классика: «Можно ли сказать, что хороший завтрак лучше дурной погоды?»

Тем более контрастным видится рост интереса к этому жанру после сонетного дебюта Мицкевича в России (*Сонеты Адама Мицкевича*, Москва, 1826). Вяземский стал автором первого прозаического перевода его сонетов. Кюхельбекер в 1829 г. начал заниматься сочинением сонетов после случайного знакомства с «Крымскими сонетами» в переводе Вяземского. Пушкин обратился к сонету в 1830 г., создав «Сонет», «Поэту» и «Мадонна». Чрезвычайно важно, что он обращается не только к вековой истории жанра, но и называет современных ему поэтов, писавших сонеты — Вордсворта, Мицкевича и Дельвига.

Нововведением польского поэта стало то, что публикацией своего сборника он показал путь развития жанра — от подражания петрарковской традиции к созданию собственного варианта сонета, то есть сонета как самостоятельного элемента цикла.

Важную роль в формировании русской сонетной традиции сыграли обильные переводы «Сонетов». В течение нескольких лет варьировалась и форма сонета. После публикации Вяземским прозаических переложений появились переводы, отмеченные ригористическим соблюдением всех верификационных правил. Они принадлежали А. Д. Илличевскому. В 1829 г.

В. И. Любич-Романович издал том поэзии Мицкевича, а И. И. Козлов — том своих переложений «Крымских сонетов». Для обоих переводчиков характерно стремление к большей независимости и раскованности. Во всяком случае, только в 40-х годах произошла канонизация жанра в поэтическом переводе: русский эквивалент сонетов Мицкевича был максимально приближен форме оригинала.

Затем мы рассматриваем творчество некоторых русских сонетистов, испытавших возможное влияние польского мастера.

Первые пять сонетов Дельвига, написанные около 1820 г., возникли как цикл и вполне вписываются в традиционный петрарковский репертуар. Последний, шестой сонет, опубликованный после смерти автора, является произведением, которое напоминает по своему сюжету некоторые сонеты из крымского цикла Мицкевича. Близость сонета А. С. Хомякова к сонетам Мицкевича наблюдается в общих восточных мотивах. Сонет П. А. Катенина «Кавказские горы», навеянный пребыванием поэта на Кавказе является, напротив, насмешкой над романтической поэзией. В начале 30-х годов П. П. Ершов и М. Ю. Лермонтов создали разножанровые циклы, в которых сонет выступает, как синтетическая форма. В эпоху романтизма создали «тома сонетов» совсем забытые сегодня М. И. Максимов, Н. М. Бутырский и другие. В. Г. Бенедиктов был автором цикла сонетов, в котором прослеживается столкновение натурфилософской и интимной линии, до него продемонстрированное Мицкевичем.

Совершенно прав М. И. Максимов, который написал в 1828 г. в предисловии к своему «Опыту сонетов»: «Первый опыт русского Сонета был представлен Третьяковским <...>; после чего, до начала нынешнего столетия, Сонеты у нас почти были забыты, мелькая изредка только в периодических изданиях; наконец польский Стихотворец Мицкевич, напечатавший сонеты свои в Москве, дал им некоторый ход в нашей Литературе».